しろね図書館だより

発行 新潟市立白根図書館
No. 91　平成19年12月1日

✿ 12月の展示架テーマ 「Christmas Tales（クリスマス テイルズ）
～クリスマスによみたいほん～」

今年もあと1ケ月で終わります。この頃になると毎年のように「一年が過ぎるのは早いなあ」と感じます。おとなのみなさんはそう感じるのではないでしょうか。ここでおとなと限定したのは、子どもとおとなでは時間の感覚にだいぶ違いがあるみたいなのです。

ほとんどの人が思うことでしょうが、子どもの頃は早く上級生になりたいと思ったり、早くおとなになりたいと願っていましたが、その頃とは逆におとなになると、子どもの頃をなつかしんで戻りたいと願う人はきっと多いと思います。

この事と時間の感覚についての関係性は分かりませんが「時間」に関してはたくさんの本も出版されています。時間は本当に実在するのかといった哲学的なものから自然科学的なものまで。でも、あまり難しく考えるのは専門家に任せて、簡単に「おとなになったんだ」程度に考えていた方が悩まなくて良いですよね。もし、詳しく調べたい人がいましたら、どうぞ図書館へおいでください。ご案内いたします。

11月の

来館者 ----- 15,776人（視察・見学60人含）
貸出冊数 --- 15,781冊
予約件数 --- 271件
ブックバス利用者 --- 546人
ブックバス貸出冊数 --- 1,521冊

リクエスト情報（しばらくお待ち下さい）

1位 ホームレス中学生（16名）
2位 楽園 上・下（8名）
3位 鈍感力（6名）
4位 おひとりさまの老後 女性の品格（3名）
他

12月22日(土) クリスマスおはなし大会

冬のおはなしや絵本をいっぱいあつめました！
プレゼントももらえちゃうかも!?

1回め 午後2:00～2:30
2回め 午後2:30～3:00
赤ちゃん・小さい子向け

3回め 午後3:00～3:30
4回め 午後3:30～4:00
小学生以上・ひとりで聞ける子向け
※整理券が必要（午後2時から配布）

子どもたちといっしょに

「わたしのすきなもの」 フランソワーズ さく　なかがわちひろ やく（偕成社）

あなたのすきなものは何ですか？子どもたちのすきなものは何ですか？
アイスクリーム？洋服？家族？　ゆっくり考えてみてください。
「あれもすき」「これもすき」ねっ、たくさんでてきたでしょう？両手じゃ数えきれないほどに！
すきなものがまわりにあるというのはすばらしいことですよね。それだけで楽しく、ゆかいになって、寒い冬でも笑顔になります。
もうすぐクリスマス、あなたのところに「すき」なものがおとずれますように。

第86回読書会 「孤笛のかなた」 上橋菜穂子（理論社）

12月16日(日) 午後2:00～　場所：白根学習館プレイルーム

不思議な力を受けついでしまった少女く小夜>と呪者に使い魔にされてしまった霊狐<野火>。人間と狐、生きる世界がまったく違う二人が、強い心を持ち、敵同士であっても互いに魅かれ合い、ついには結ばれていく物語。
守り人シリーズの作者が贈る物語で、心の中に《なつかしい場所》がよみがえる。

2008年1月12日(土) 白根学習館ラスペックホール
新宮晋氏講演会
～ユニークですてきな自然（仮）～

来年すぐに白根図書館では、講演会を開催します。講師には、世界的に有名な新宮晋さんをお招きし、身近な自然がどんなにすばらしいものなのかを映像をまじえながら話していただきます。

12月の行事

1(土)	おはなし会 3:00～	16(日)	第86回読書会 2:00～
2(日)	おはなし講習会②	19(水)	絵本のじかん 3:00～
5(水)	絵本のじかん 3:00～	22(土)	おはなしかご例会 (10:00～ クリスマスおはなし大会！
8(土)	おはなしかご例会(10:00～ おはなし会 3:00～	25(火)	雑誌リサイクル
9(日)	おはなし講習会③	26(水)	絵本のじかん 3:00～
12(水)	第54回 あかちゃんかはじめてのあうほん 絵本のじかん 3:00～	29(土)	休館
15(土)	おはなし会 3:00～	2008年1月5日(土)から開館します	

新潟市立白根図書館は12月29日(土)～2008年1月4日(金)まで休館します。ご迷惑をおかけしますが、来年も心よりお待ちしております。

★☆★☆★　図書館員がおすすめするこの一冊　★☆★☆★

「ルリユールおじさん」　いせひでこ　理論社　（絵本　E イ）

“絵本”一絵本だから子どもの読み物だと決め付けるのは間違っています。おとなが読んでも楽しめるものはほんとにたくさんあります。おとなになっても絵本からだってたくさんのことを学べるのです。

この「ルリユールおじさん」もその一つ。フランス語を学んだ人なら想像がつくかもしれませんが、題名からはどんなおじさんの物語なのかわかりません。ルリユールという人の名前なのでしょうか？

～　で、本を開いてみます。　～

まず目に飛び込んでくるのが淡い感じの水彩画。見開き一面に描かれた絵は朝の静寂さがにじみ出ています。この感じはフランスのパリでもアメリカのN.Y.でも日本の新潟でもどこでも変わりはないでしょう。すがすがしい空気の中、外には人影もまばらで、鳥の声だけが聞こえています。まだまだ寒い季節。不思議なことに自分が絵の中にいることに気づいてしまう。一瞬にして絵本の虜になっていました。その風景のなかに女の子とおじさんだけがいます。近所に住んではいるが顔見知りではなさそうです。

女の子は絵を描くことも本を読むことも好きみたいで、とりわけとても大切にしている本があります。それは植物図鑑。でも、あまりによく読んだためにその図鑑はばらばらになってしまって、古本屋のひとに「ルリユールのところにいってごらん」と薦められ、ソフィはルリユールおじさんを探します。やっとみつけたルリユールおじさん。口数は少ないけどもとても優しそうな感じがします。おじさんの手によってソフィの図鑑に新しい命を吹き込まれます。それはソフィだけの世界にひとつだけの本。きっとソフィにはおじさんの手が魔法のように見えたでしょう。

ゆっくりとした時間のなかでひろがるこの絵本の世界。おじさんとソフィの会話がかみ合わないところもソフィの無邪気さがすごく伝わってきます。

「ルリユール」ということばには「もう一度つなげる」という意味もあるそうです。本に限ったことではありませんが、人には他には替えがたいほど大切なものがあるはずです。

今の時代、「直して使う」ということをする人がまわりに何人いるでしょうか？「もったいない」ということではなくてモノに愛着をもってほしいのです。図書館の本でも自分の本でも気に入った本は大切にしてほしい。

作者によるとこの「ルリュール」はヨーロッパで発展していて、日本の文化にはないそうです。そして、現在では数えるほどになってしまったそうですがフランスには何代にも渡ってこの職業を生業としている人たちがいます。

日本にそういう職業の人はいないかもしれないが、同じように何代にも渡ってモノを修復するひとたちはたくさんいます。以前に山口県岩国市の錦川にかかる錦帯橋の架け替えの作業をテレビで見たことがありますが、先代の業を受け継いで作業をしている人物がいました。「後世につなげていこうとする」これも日本のルリユールの一つなのだと思います。

本が好きな人に読んでもらえたら、きっと「あ、こんな仕事をやってみたいな」と思ってくれるでしょう。ぼくもその一人です。

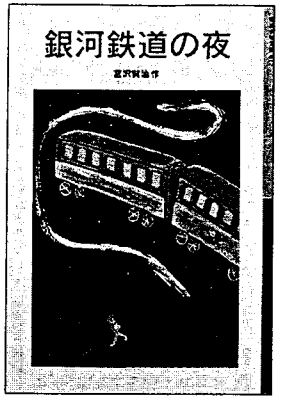
（司書　小林友治）

第85回 読書会

平成19年11月18日（日）
午後2時～　参加者4名

『銀河鉄道の夜』

（岩波書店ほか）
宮沢　賢治　作



出稼ぎに出たまま音信不通の父と、病弱な母を持つジョバンニは、苦しい家計を支えるため活版所で働く毎日。友達からも疎外感を感じる中で、カムパネルラだけが彼の親友であった。

ケンタウル祭の夜、気がつくとそこは、夜空を駆ける銀河鉄道の客室だった。不思議に思いながらも、カムパネルラとの旅に心躍らせるジョバンニ。

宮沢賢治の美しい筆致が描き出す、窓の外に広がる幻想的な光景の数々。不思議な人々との出会い、そして別れ。

「ほんたうのさいはひ」を求めて、幻想の星々を巡るふたりの旅が今、はじまる――。

★★　参加者の感想から　★★

◆一つひとつの文章はとても詩的で美しいが、なんとなく世界に入りきれない感じがあって、確認のために何度も読み返してしまった。

◆宇宙や石の好きな人なら入りやすいと思う。

◆昔見た劇場版（登場人物が猫）を覚えていて、そのイメージで読んだ。するっと読めるような話ではないと思うが、場面場面を脳内でうまく映像化できるとより読みやすく、楽しめるんじゃないかなと思った。

◆幻想的で、不思議なものがたくさん出てくるが、不思議なことは不思議なことのまま、ほとんど説明されない感じで、読む人の解釈に委ねられている。細密に描写して雰囲気を出すんじゃなくて、力のある言葉を投げかけて、読む人の想像力の中から物語を引き出すタイプだなと思った。

◆版によって大分違いがある。自分が読んだのは、後から加筆された部分が入ってなくてわかりにくい部分があったが、他の本を見てみたら納得できた。解説を見るとなるほどと思うことが多い。

◆切符を確認する場面で、ジョバンニの切符だけがどこまでも行けるフリーパスだった。他の客は死んでいるからもう行き先が決まっているが、生きている限りはどこまでも行ける、無限の可能性があるということなのかなと思った。

◆死んだ人が乗る銀河鉄道のなかで、ジョバンニだけが生きている。悟りきったような雰囲気の中で、ジョバンニだけが嫉妬したりとか、生き生きとした部分を見せてくれるのがよかった。

◆列車から降りるときの博士？の話が、この本のテーマなのかなと思った。

◆「ほんたうのさいはひ」について何度も言及される。本当の幸せはその人によって違うのだろうが、サソリの話、沈没船の話、ジョバンニの「ほんとうにみんなのさいわいのためならば、ぼくのからだなんか百べんやいてもかまわない」という台詞など、自己犠牲の精神が強く表れているように感じた。宮沢賢治にとっての幸福とは、他人のために自分が犠牲になることだったのだろうか。ストイックだが、あんまり幸せそうな生き様ではなさそうに思えた。

◆他の命を奪ってこれまで生きてきたのに、どうして自分の命をイタチにくれてやらなかったのだろうと悩むサソリの話が印象的。人間なら、口から入る栄養になることはできないけれど、何を残せるんだろうか、ということを考えてしまう。もっと精神的なもの、人間というのは自分の思いを子どもたちに残していかねばならないんだな、と思う。

★　★　★　★

さて、次回の読書会は、
上橋　菜穂子　作

『狐笛のかなた』（理論社）

12月16日（日）　午後2時～
（会場はプレイルームとなります）

本は、図書館カウンターで貸し出ししています。どなたでも気軽に参加できますので、どうぞおいでください。読書の幅が広がりますよ。

（清水　隆）